

帝都地下迷宮

中山七里

第二回

3

闇の底にいたのが警官でもなければ逃走中の犯罪者でもなくただの女の子だったので、小日向こひなたの緊張は一気に解けた。

「こんなところで何してるの」

そう訊かれると後ろめたい分、むっとした。

「それはこっちの台詞だ。せりふ今、何時だと思っているんだよ。どこだと思ってるんだよ。君みたいな女の子がうろついていい時間と場所じゃないぞ」

「校則じゃあるまいし」

女の子は生意気に鼻で嗤わらう。

「時間と場所が問題になるんだったら、あんただって充分に怪しいじゃないの。電車も通らず、立ち入り禁止の廃駅にいったい何の用

事があるのよ」

「君に言われる筋合いはない」

「あたしだって不審者に説教される覚えないから」

言い返そうとしたが、不審者という指摘は間違っていない。立ち入り禁止区域に無許可で侵入しているのも確かなので、他人に説教する立場でないのもその通りだ。

「言っとくけど不審者じゃない。別に犯罪者でもなけりや逃げている訳でもない」

素性の分からない女の子相手に自己弁護するのは妙な気分だった。

「第一、君だって怪しい人間だ」

「作業着姿でもメトロの関係者でないと見破るくらいには、常識あるんだけど。それ、どう見たって犯罪者の下手な変装」

「僕はただの鉄道ファンだ」

すると女の子は、更に疑い深い表情になった。

「ただの鉄道ファンが、どうして不審者みたいなことしてんのよ」

「だから不審者じゃないって。何度言ったら分かるんだ」

業を煮やした小日向は懐から身分証を取り出した。

「へえ。区役所の職員さんなんだ」

女の子は面白そうに身分証の写真と本人の顔を代わる代わる見る。

「で、その区役所職員の小日向さんが、何で不審者みたいな真似しているのよ」

「君は全然、人の話を聞いてないな。僕はただの鉄道ファンだと言っただろ」

同じ問答を繰り返しているうち、小日向は自分がかかわれていることにようやく気づいた。

「……大人をからかって面白いか」

「別にからかってないよ。こうして話していたら、ホントに怪しい人かどうか分かるもの」

「怪しくないと分かっただろ」

「まだ質問に答えてないじゃん。どうして鉄道マニアの区役所職員さんが、電車が通らない廃駅にやってくるのよ」

「鉄オタにはそういうジャンルがあるんだよっ」

つい意地になって、鉄道オタクおよび廃駅鉄の説明を始める。すると女の子も最初のうちは興味津々の様子だったが、廃駅の魅力についてはもう一つノってくれない。

ああ、いつもここで失敗するんだ——小日向は苦い気分とともに既視感を覚える。

今まで何度か自分の趣味を他人に語る機会があった。鉄道が趣味というところまでは辛うじて許容してくれる者も、廃駅という単語

を聞いた途端に腰が引ける。そういう失敗を繰り返して小日向は世間を狭くしていったのだ。

「廃駅鉄とかよく分かんないけど、少なくとも小日向さんが怪しくないことは分かった」

女の子は小さく頷いてみせたものの、まだ完全に警戒心を解いた訳ではなさそうだった。腕組みをして小日向の動きに目を光らせている。

「要はマニアなんでしょ。アイドルとか声優とか、どうしてマニアっていつもいつも非合法なことしたがるんだろ」

全世界のマニアというマニアに喧嘩を売するような発言だったが、現に小日向は違法な行為をしているので反駁はんぱくできない。

「君ね、大人相手にそういう上から目線で喋るのをやめろ。失礼だとは思わないのか」

「失礼なのはそっち」

「何がだ」

「話を聞いていたら小日向さん、ここに下りてきたのは今日が初めてなんだよね。初めてきたお客だったら、その住人に敬意を払う

べきよ」

「住人だって」

「そ」

女の子は澄まして顎をくい、と上げた。

「そつちが身分証を提示してくれたから、こつちも自己紹介しなきゃね。あたし遠城香澄、十七歳」

「名前は分かった。でも、ここの住人ってどういう意味だよ」

「意味も何もそのまま。あたし、ここに住んでるのよ」

「何だ、その歳でホームレスなのか」

「ちーがーうっ」

香澄は人差し指を振りながら言う。その仕草がちよつと可愛いのが気に食わない。

「とにかく、あたしは先住民。小日向さんは招かれざる客。その辺の立場は弁えてよね」

招かれなければ来てはいけない場所なのか、と言おうとしてやめた。その通りだからだ。

「分かったなら、さっさと帰って」

「ちよ、ちよつと待てよ」

あまりの権柄けんぺいづくに腹が立った。加えて香澄の物言いがどうにも鼻につく。

「何よ」

「萬世橋駅をまるで自分の家みたいに言ってるけど」

「まるで、じゃなくて、れっきとしたあたしの住まいなの」

「そんな理屈で、いい大人が黙って従うと思うか」

「マニアが昂じて違法行為こうするような区役所職員さんが、いい大人なの」

「口の減らない子だな」

「そりゃー、先住民だもん」

「警察に通報して保護してもらおう」

「……通報した時点で、小日向さんもここに立ち入ったことがバレるんですけど」

「家出少女を無事に保護するのが先決だ」

我ながら低次元の物言いになっているのは自覚しているが、止まらなかった。

「家出なんてしてないのに」

「地下の廃駅を根城にしているなんて、家出少女以外の何者でもないだろ」

香澄は呆れ果てたように、首を横に振る。

「厄介やっかいな人に見つかっちゃったなあ」

「何がどう厄介なんだよ」

「本心じゃなくっても、一度口に出したから引っ込みつかなくなるタイプでしょ、小日向さんて」

そういう言い方をするから、余計に引っ込みがつかなくなる。

「規則とか世間とかジョーシキとかのせいにして、自分の責任転嫁するタイプ。公務員に多いんだよねー、そういうの」

「公務員をバカにするな」

「馬鹿にしてるんじゃないの。見切ってるの。いきなり香澄はくると背を向けた。」

「おい」

「ついてきて」

後ろも見ずに、そう言った。

「招かれざる客も客のうち。あたしの家、案内してあげるから」

「おいったら」

「来るの？ 来ないの？」

こういう場面で二択を迫るのはずるいと思ったものの、小日向は仕方なく彼女の後を追うことにした。

香澄はライトを翳して神田駅方向に進んでいく。住人かどうかはともかく萬世橋駅構内を根城にしているのは確からしく、迷うような素振りは一切見せない。

「どこにいくつもりだよ」

「小日向さんも、こっちに向かったんじゃないの」

「いや、向かってたけどさ。神田駅に香澄ちゃんの家があるのかい」

「あたし一人の家じゃないけどね」

何やら意味不明の言葉を吐きながら、香澄は線路上を進む。こうして暗闇の中を二人で歩いていると、子供の頃に楽しんだ肝試しを思い出す。

やがて構内の壁に『神田川 中心籽程 10K500M』と書かれた標識を見た。

ここが神田川の真下だ。

胸騒ぎのするシチュエーションは邪魔者がいても、いささかも減じることがない。耳を澄ませると、微かに川の流れのような音も聞こえる。

ふと柱を見ると大ぶりの取っ手が埋め込まれている。これは半ば密閉状態のトンネル内がシリンダーと同じ条件になり神田駅で電車が移動する度に突風が発生するので、身体を固定させておくための道具だ。何の変哲もないありふれた取っ手だが、由来を知る者にはこの上なく興味溢れるものに映る。

気がつくとき香澄がこちらにライトを向けていた。

「何だよ」

「廃駅マニアって、変なところに興味があるんだなって感心してた」
「別に変じゃないだろ。身体を突風から護るための取っ手とか、真上から聞こえる神田川とか感動ものじゃないか」

「ここに住んでみなよ。感動とか言ってられなくなるから」

返ってきた声はひどく不機嫌そうだった。

「風が吹く度に物に掴つかまってなきやいけなかったり、神田川が増水する度に心細くなったり、そういう時の不安を知りもしないで、知ろうともしないで。だから見物目的のお客っていけ好かないんだ」
妙に説得力のある文句だったので、香澄がずっと地下を住す処まにして
ているのは真実ではないかと思えてきた。

更に進むと、進行方向から淡い光が洩れていた。近づくにつれて徐々に音声も聞こえてくる。音声には砲撃やら銃撃やらの音に混じって数人の叫び声も入っている。

至近距離まで近づくると、ようやくそれが映画の音であるのが分かった。何と構内の壁をスクリーン代わりにして、アクション映画を投射しているのだ。

「何だ、香澄ちゃん。買い出し、えらく早かったじゃないか」

反対側の壁に凭もたれ、たった一人で映画観賞していた男が声を掛け
てきた。親しげな口調だったが、彼女の背後に小日向の姿を見つ
けるなり声を剣呑けんおんにした。

「後ろの男、誰だ」

「招かれざるお客」

「何だって」

「わざわざ作業員に変装して、廃駅を探検しにきた鉄オタなんだっ

つゆ」

男はむくりと立ち上がり、小日向に詰め寄った。

「廃駅が趣味の鉄オタだと。そんな酔狂すいきょうな人間がいるもんか。どうせ吐くなら、もつとらしい嘘を吐いたらどうだ」

内心うんざりしながら、小日向は鉄道オタクの中に廃駅鉄というジャンルが確立している事実を縷々るる述べる。身元を証明した方が信憑性びようせいも増すと判断したので、男にも身分証を提示する。

「妙な趣味があつたもんだ」

熱心な説明を受けると、男はそれなりに納得した様子だった。もちろん身分を明らかにしたことが説得力を補完したのだろう。今日ほど公務員になってよかったと思つた日はない。

「それにしたつて香澄ちゃんよ。何だって、こんなところまで連れてきたんだ。さつさと萬世橋駅から上に追い出すべきじゃなかったのか」

「追い立てたら、警察に通報するつて騒ぎ出したんだよ」

香澄は忌々いまいましそうにこちらを睨んだ。

「じゃなかったら、あたしが連れてくるはずないじゃない」

「そういう事情か」

男も同じように小日向を睨む。睨み方は香澄よりも鋭く、はつきり威嚇いかくされているのだと認識した。

「で、どうするよ」

「取りあえず久ジイにお伺い立てようと思って」

「だよなあ。通報されて騒ぎになったら、火消しするのも面倒だし、ちんにゆうしや 闖入者の生殺与奪は久ジイの専管事項なものな」

生殺与奪などと物騒な単語を聞き、小日向は一瞬後ずさるが、後方では香澄が退路を塞いでいた。

「小日向さん、だったな」

「はい」

「聞いての通りだ。あんたは不法侵入者で囚われの身だ。迂闊なことはするなよ。こっちには人数と地の利がある。逃げたって、すぐに追いつかれるからな」

男は永沢透と名乗った。プロジェクトからこぼれる光で永沢のながさわとおる人相風体にんそうふうていが分かる。五十がらみでやや肥満体型、目つきは険しいが理知的な顔立ちをしている。

「こんなところで映画鑑賞ですか」

「ああ、好きなもんでね」

永沢はがらりと口調を変える。

「東京じゃあミニシアターなんて洒落たもんはさ、防音設備と広さが必要だから高嶺の花なんだ。その点、地下なら防音も広さも簡単に確保できるだろ」

「一瞥いちめつするとプロジェクターは持ち運びできる携帯タイプだ。プレーヤー共々、構内から電線を引いてきて変圧しているらしい。」

「確かにここは贅ぜい沢な空間ですよね」

「お追従ついでを返すと、永沢は満更でもない風だった。」

「まあメトロからちよいと電気を拝借しているが、許容範囲だしな。それに俺一人が愉たのしんでいる訳でもない。今日は面子めんづが集まらなかったが、普段なら多い時で十人以上が集まってるんだぜ」

「へえ、じゃあ、ますます映画館ですね」

「いや、元々そういう施設なんだって」

「永沢は何を今更いまさらというように返してきた。」

「これはな、れっきとした公共の娯楽施設なんだよ。そりゃあプログラムは館主である俺が決めるんだが、この住人なら誰でも入場できる」

「必要、なんでしょか」

「当たり前だろう。いくら地下が広いと言ったって、地上みたいな何でもかんでも揃そろっている訳じゃない。しかし最低限、文化的な生活をするのに娯楽は必要不可欠だ。映画館の一つはなくちゃな。上だって同じだろ。映画館をなくした町っていうのは、文化的に衰退たいせつしていくんだ」

「よほど映画が好きなのは分かるが、小日向にはまだ永沢の話し

ている内容が理解しきれていない。

「あの、ここにはいったい何人の人が住んでいるんですか」

「そんなことを聞いてどうする」

永沢はまた警戒心を露わにした。

「あんた、ひよつとして公安か何かじゃないのか。公安だったら身分証の偽造くらい平気でやるって言うしな」

「とんでもない。正真正銘、ちゃんとした区役所職員ですよ」

怪しい人々から身分を疑われるのは業腹だったが、二対一の現状では下手に逆らえない。

「検めさせてもらおう」

永沢は無遠慮に小日向の身体を上から下へとまさぐる。彼の指が、スマートフォンと工具類を察知して取り上げる。

「これでも武器になるからな。話が済むまで預かっておく」

「じゃあ、後はあたしが連れていくから」

「いや、俺も一緒にいこう。武器を取り上げても、香澄ちゃんを人質に取って逃亡を図るかもしれん」

「そんなこと、しませんよ」

「人質を取ると最初から予告するヤツなんて、いねえよ」

そこから先は、両脇を永沢と香澄に挟まれての連行となった。話の流れでは久ジイという人物の前に引き出されるらしいが、生殺与

奪の権を握っているというかの人物は、自分をどうするつもりなのか。地下に住まうような曰くありげな者たちを統べるのだから、さぞかし悪辣で強面のする男なのだろうと想像する。

無理やり法廷に立たされる被告人はきつとこういう気分には違いない——小日向は二人に引き摺られるようにして歩く。

途中、壁に沿って並べられたスチール製の本棚を目にした。小日向の背丈ほどもある棚が五架、そのうち四架に隙間なく書籍が収められている。

「あれは、ひよっとして図書館ですか」

「ひよっとしなくてもそうさ」

永沢はこれも至極当然という口ぶりで言う。

「文化つてのは娯楽と教養だからな。俺たち〈エクスプローラー〉の文化は映画と本が担っている」

聞き慣れない単語だったので、つい鸚鵡返しになった。

「〈エクスプローラー〉?」

「それより不思議に思わないか、あの蔵書量」

何かまずい話題に触れたのか、永沢は質問を無視する。

蔵書量と言われれば確かに奇妙でもある。棚に近づいてみると、一般文芸の他にも辞典や専門書、自己啓発本にガイドブックなど種類はひどく雑多だ。いち個人の所有としては守備範囲が広すぎる気

がする。

「図書館にも不要図書つてのがあってな。造本がくたくたになったのとか、ほとんど貸出されなくなった本だ。そういう本は市民サーブスの一環で、一般市民に放出される。もちろんそれだけじゃ古本を集めただけになるから、最新刊や新古書も揃えている。こっちは電車に置き忘れたり、読み捨てられたりした本なんだが、まあ新刊には違いない」

電車に置き忘れた本がどうしてこの棚に収まっているのかが不可解だったが、非合法の臭いがあるので敢えて訊かなかった。

「でも、なかなかあたしの読みたい本、ないんだよね」

香澄は不満げに茶々を入れる。

「そんな時はどうするんだよ」

「別に。自分で買ってきて、読み終わったらこの棚に放り込む」
蔵書は増える一方という訳だ。

「言っとくが、教養はこの図書館だけじゃないぞ」

小日向の質問を侮蔑とでも受け取ったのか、永沢は躍起やっせきになって言葉を重ねる。

「ここには年齢に応じた学校だってある。当然、教師も存在する」
「それはリースクールみたいなものですか」

答えようと永沢が口を開きかけた時、香澄が割り込んできた。

「永沢さん、喋り過ぎ」

「おっと」

永沢は慌てた様子で自分の口を押さえる。

「聞き上手なヤツだな。危ない危ない」

尚も進むと、構内の至るところで明かりが点^{とも}っていた。それぞれの照明の下でいくつもの影が蠢^{うごめ}いている。

小日向の目には、まるで天井が低く奥の長いサロンのように見えた。ある者たちはテーブルを囲んで酒を酌み交^まわし、またある者たちは将棋を指している。ある者は携帯オーディオに耳を傾^いけ、そしてまたある者はゲームに勤^{いそ}んでいる。

驚いたことに、テーブル四脚ほどの小さな食堂まであった。壁に貼られた品書きを眺めれば、ヤキソバ・フランクフルトといった夜店のようなメニューからホッケにカレイ、軟骨といった居酒屋のメニューまである。皆、和^{なご}やかに語り合^あい、笑い継いでいる。これでシャンデリアと音楽さえあれば、どこかのホテルの立食パーティーを彷彿^{ほうふつ}とさせる。

「おう、香澄ちゃん。何だよ、その作業員」

そばを啜^{すす}っていた男が三人に視線を向けた。

「見掛けない面だな」

「部外者」

香澄は素っ気なく答える。詳細を説明すれば面倒なことになるとでも考えたのだろうか。

だが香澄の配慮も空しく、住人たちは一斉に目の色を変えた。

「何だと」

「警察か」

「どこからきた」

さっきまで和やかだった空気が一瞬にして刺々しくなる。香澄は目の前の羽虫を払い除けるように手を振る。

「あー、大丈夫大丈夫。身元のしっかりした不法侵入者だから。今から久ジイに会わせるところ」

「こいつ一人か」

「そーよ。不法侵入というより迷い込んだってのが正確みたい」

「永さんと二人でホントに大丈夫かい。何ならこの場で、二度と口が利けないように」

「だからあ、そういうの決めるために久ジイに会わせるんじゃない。ここで勝手なことしたら、逆に叱られちゃうよ」

香澄の言葉には相応の説得力があったらしい。いったんは猛々しく腰を上げた男たちも、ゆっくりと元の態勢に戻る。

「何かあったら叫べよ」

「その前に、俺がこいつを叫ばせる」

永沢は脅かすように言う。話せば気のいい男のようだが、まだ小日向への警戒心は解いていない。

初めのうちこそ二人の隙を見て逃げ出そうとも考えていたが、これだけの人間を相手に、しかも不慣れな地下空間で逃走してもすぐ捕まるのが関の山だ。

逃げるにしてもここではまずい。まず久ジイとやらに会えば、皆の警戒心にも隙ができるのではないか。

いや、待て。その久ジイと会った拳句あひくに厳しい処罰を下されては元も子もないではないか。

不安と緊張、加えて見知らぬ世界に迷い込んだ動揺で思考が追いつかない。

「いくぞ、ほら」

永沢に背中を押され、小日向はまた歩き出した。サロンのように煌々とした場所から遠ざかり、しばらく元の暗闇が続く。

「ここらは、どの辺りなんですか」

問うと、永沢が応えてくれた。

「まだ萬世橋と神田の中間くらいだな」

住民が屯たむろしていた区域が結構長く感じられたが、それでもまだ中間地点というのは生活拠点たむろが存外に狭いことを示している。地下といても縦横無尽に使用できるという訳ではないらしい。

先方に薄ぼんやりと光源が見えてきた。近づくにつれて、二つの人影が明瞭になっていく。

明滅を繰り返し今にも切れそうな蛍光灯の下に佇たたずんでいたのは、老人と中年男のひと組だった。目を凝むらせば、老人は剥むき出しの腕を男に捕まえられている。

「毎回打っておるこの注射、本当に効くのかい。どうも効いている実感がないんだがね」

「気分が前より悪くなったり、どこか急に痛み出したりということはありませんか」

「ねえよ」

「現状維持なら効いている証拠です」

「医学つてのも大したことねえんだな」

「できることとできないことがはっきりしているんですよ」

相手の医師らしい男との話を畳むと、老人はゆっくりとこちらに向き直った。

顔に刻まれた皺しわの多さと深さで相当な高齢者であるのが分かる。

重たまぶたそうな目蓋で両目がへの字になっているが、本当に笑っているかどうかは定かでない。

「ほ。お客さんかい、香澄ちゃんよ」

「お客さんかどうかは久ジイが決めて」

香澄が小日向を見咎めた事情を説明すると、久ジイと呼ばれた老人はじつとこちらを睨んだ。

「小日向さん、だったな。好奇心、猫を殺すという諺を知っているかね」

たまに聞く言葉だが、真の意味までは確認したことがないので黙っていた。

「猫は九つも命を持っておると言われる、それくらいしぶとい生きものだ。そんな猫でも好奇心を發揮したばかりに、あっさり命を落とすことがある。好奇心てのは、それくらい危険だっちゆうことさ。お前さんは、その好奇心を満足させるため、ここに潜り込んだ。だったらそれ相応の覚悟もできておるんだろ」

「勘弁してください」

小日向は情けない声で命乞いをする。

「地下にこんな居住区があるなんて思ってもいなかったんです」

「じゃあ何があると思った。朽ち果てた電車の残骸か栄華の跡が転がっているとも思ったのか。いずれにしてもあなたは、許可なく入ってはいかん場所に足を踏み入れた。好奇心を持った猫と同じだ。しかも予想と違い、廢墟に居住する者の存在を知って好奇心は前より膨らんでおる」

久ジイは睨めつけるようにこちらの表情を窺う。小日向が不安そ

うにしているのを愉しんでいるように見える。

「どうして廃駅にわたしが住んでいるのかは話す訳にはいかん。しかし好奇心の強いあんたなら、秘密にしている事柄は尚のこと知たがるだろう。わたらにしてみれば危険極まりない。わたらはただ静かに生活したいだけなのに、あんたのような人間に詮索されたんではおちおち枕を高くして寝られん」

話の行く先がどんどん物騒になっていく。小日向は思わず身を固くする。

「何故、好奇心が危険かというと、人は知り得た秘密を他人に吹聴ふいちようしたくて堪たまらない動物だからだ。お前が知らないことを自分は知っていると自慢したくて仕方ないからだ。このまま解放したら、あんたは間違まちがいなく仲間**にぶちまける**」

「仲間なんていません」
我ながら情けない抗弁だが、そう言うしかない。

「廃駅鉄なんて本当にマニアの中のマニアで、同好の士なんて一人も知らないんです。撮った写真や動画を眺めたり、大昔の路線図を見るだけで嬉しがってるだけなんです。絶対、他人に洩らしたりしません」

「そりゃあ、そう答えるしかないだろうさ。しかしね、今は使われなくなった地下鉄駅構内に人が住んでいるというだけでも、結構な

ニュースになる。今日びは自分で撮影した動画をテレビ局に売る輩やからも沢山おるそうじゃないか。あんたがそういう輩の一人ではないと、誰が保証してくれるかね」

「僕はそんな人間じゃない」

「それを区役所職員の身分証が証明してくれるかね。言っとくが、わしはこれまで役所の連中にはずいぶんと苦い汁を味わわされた。ここにいる者は大抵似たような覚えがある。別に積年の恨みをあんたにぶつけようとは思わんが、その身分証が水戸黄門の印籠いんろうと同じ効き目を持つとは考えん方がいい」

後ずさろうとしたが、永沢が背中をがっしりと掴つかんでいるために身じろぎもできない。追い詰められた獲物を弄もてあそぶように、久ジイの顔が迫ってくる。

「同好の士はいない。しかも独り暮らしということだったな」

「そ、そうです」

「そんな恰好をしているからには、闇夜に紛れて巡回中の警官にも目撃されず、違法行為の痕跡を残さないように苦労したんだろ」

「仰おっしゃる通りです」

「ということだ。あんたが急に消息を絶ったとしても、すぐに気づく者はおらんということだ。勤め先の上司は同僚も一日二日は病欠か何かだと思って動くまい。警察に搜索願が出される頃には、も

うあんたを搜索する手掛かりどころか身体もなくなっているかもしれない」

「……冗談、ですよね」

「あんたが迷い込んだのは、本来なら地図の上にはない地下迷宮だ。あんた一人分の死体ならどこにでも埋められる。元々地下だから、探そうとする者も掘り返そうとする者もおらん。文字通り迷宮入りという訳さ」

すすすすと久ジイは音を立てた。歯の隙間から洩れ出る笑い声だった。異常なシチュエーションと相俟あいまって、小日向の肌は粟立あわだった。

小日向の自由を奪う手は、尚も力を強める。助けを求めようと香澄に目を向けるが、彼女は知らん顔で天井を見ている。

やめてくれ。

殺さないでくれ。

よほど切羽詰まった顔をしていたのだろう。

小日向を覗き込んでいた久ジイは、ふいに同情するような話しぶりに変わった。

「しかし、わたしたちは別に血に餓えた殺人鬼でもなければ、スパイを罾なぶり殺しにするような革命集団でもない。極めて平和主義の、穏便な臆病者たちだ」

これだけ脅かしておいて何が穏便な臆病者だと思ったが、口にはしなかった。

「あんたも、こんな場所に埋められたくはなからう」

「はいっ」

「しかし一方、あんたをこのまま帰すのは危険極まりない。そこで一つ提案がある。小日向さん。あんたもこの住人にならんかね」

あまりに突飛とっぴな申し出に反応が遅れた。

「……え」

「あんたもこの住人になれば共犯者ということになる。共犯者になれば、おいそれとわしらのことを口外もせんだろう」

何だ、それしきのことでもいいのか——気が張っていただけに、久ジイの提案は至極単純に思えた。

「住人になるって、ここに寝泊まりしろって意味ですか」

「自宅には着替えを取りにいたり、風呂に入ったりは許可する。

それ以外は可能な限り、皆と生活を共にしろ」

「それくらいで許してくれるんなら大助かりです」

「えらく楽な提案だと思っっているようだが、担保は取らせてもらおうぞ」

久ジイは意地の悪い笑みを浮かべて言う。

「もしわしらのことをひと言でも外部に洩らしたら、報復としてあ

んたの不都合な真実も洩らす。区役所勤めの癖に夜な夜な立入禁止区域に出没し怪しい行動を繰り返していると、区役所に通報する。それだけじゃない。顔写真つきの実名でネットに拡散してやる。今どきは、そういう常識外れの行動を喜んで叩く風潮らしいから、あんたも職を迫られるだろうし、ご家族も針の筵むしごに座らされることになる。いつそ、この地に埋められた方がマシと思えるかもしれない」

久ジイはひどい内容を穏やかに話す。静かな口調が、ただの脅しではないことを印象づける。

不法侵入がさほど重大な犯罪とは思えない。

小日向は唐突に思い出した。この場合は線路内立ち入りとして過料は千円以上一万円未満、罰としてはお咎め程度に終わるはずだ。

だが久ジイの言う通り、社会的制裁はそれで済まない。コンビニエンストアのバイトが冷凍庫の中に横たわるだけで社会的に抹殺されるような世の中だ。人目を忍ぶ趣味に現うつつを抜かす公務員には、更に厳しい懲罰が与えられるに違いない。

選択の余地はなかった。逡巡する間もなく、小日向は承諾せざるを得ない。

「分かりました。ここの住人になります」

「なりますか？」

「ならせてくださいいっ」

「うーん、そこまで強く希望されたら受け容れん訳にもいかんな」
久ジイはすうと伸ばした手を小日向の肩に置いた。

「改めて自己紹介しよう。この地下都市に住まう者たちの代表で……
まあ代表といっても何の権利もないが、一番の年寄りということ
祭り上げられておる平尾久平ひらおきゆうへいちゆう者だ。小日向さん、あんたをこ
の瞬間から〈エクスプローラー〉の特別市民と認める。よろしくな」

4

取りあえず口封じの危機は去ったものの、小日向は特別市民の意
味を充分理解できないでいた。

久ジイの許を離れる際、医師らしい男も一緒についてきた。男は
肩を落としていた小日向の背中を慰めるように叩く。

「まっ、社会的生命を断ち切られる羽目にはならなかったんだから、
よしとするべきだね」

男は間宮六輔まみやろくすけと名乗った。齢の頃は永沢と同じくらいで、眼鏡の
奥の瞳が理知的な男だった。

「間宮さん、お医者さんなんですか」

「一応はね。さっきも久ジイに注射打っていたでしょ」

「やっぱり、ここの住人ですか」

「と言うより、(エクスプローラー) かりつけの医者だね。さすがに診療所は地上にあるから。通常は地上で診療を行っているんだが、定期的に地下に下りてる」

「久ジイさんは定期健診が必要な身体なんですか」

「市民になったんだから久ジイでいい。みんな、そう呼んでいる」

間宮は気にするなどでも言うように、ひらひらと手を振る。

「別に久ジイだけの診察にわざわざ下りてきているんじゃない。小日向くんはまだここに何人住んでいるのかを聞いていないらしいな。この地下にはおよそ百人の人間が寝泊まりしている」

数字を聞いて少なからず驚いた。まさか、そんなにいるとは想像もしていなかった。

「百人もいれば毎日誰かしら身体の不調を訴える。もちろん定期的な診察なり投薬なりが必要な患者もいる。だから主治医はほぼ毎日出勤しなきゃならない。ちょっとした無医村みたいなものだよ」

「一人で足りるんですか」

「間に合わせなきゃなるまい。秘密を共有する人間を一人でも増やしたくないからね」

間宮は悪戯いたずらつぽくこちらを睨む。

「だから君一人増えるだけでえらい迷惑だ」

「すみません……」

「冗談だよ。ただ特別市民に任命されたからには、ルールを護ってくれないとな。折角せつかく久ジイが好意的な裁定を下してくれたのに、君の軽率な行動が久ジイと君自身を悲しませる結果になりかねない」

「何となく脅しに聞こえるんですが」

「何となくではなく、はっきりとした脅しだよ。この地下空間の存在を知られるとわたしの患者にも有形無形の被害が及ぶことになるのでね。自分の患者を護るためだったら、脅しの一つや二つは平気です。災いをもたらす者は当然排除する」

穏やかな口調だが、ふざけている風ではない。

「ルールというのを説明してくれませんか」

「基本的なものはさつき久ジイが言った通りさ。可能な限り住人たちと行動を共にする。着替えや入浴目的の一時帰宅は認める。もちろん仕事に出掛けるのは構わない。三度三度、食事もここで摂れと強制するものではないけど、食堂で飲み食いする場合には現金で支払うこと。そしてケータイで無闇むやみに外部と連絡しないこと。通話や画像の一部からこの存在が露見ろけんする危険性があるからね」

聞く限りは、かなり緩やかなルールに思える。雰囲気を探したのか、間宮は付け加えるのも忘れなかった。

「ルールが緩やかになっているのは、住人たちをがちがちに縛りたくないからだ。秘密を護るのは重要だが、そのために住人が監視さ

れるようでは本末転倒だからだ。ここのルールの全ては、住人にいかに快適で安全な暮らしを提供できるかという一点のみに寄与している」

「ここで寝泊まりしろって話ですけど、冬はどうするんですか」

「心配ない。神田駅の方から温風が流れてくるし、それでも寒い場合には暖房機器も揃っている」

「ゲリラ豪雨とかで地下が冠水かんすいしたらどうするんですか」

「レアケースな話を持つてくるんだな。その場合はちゃんと地上に避難するさ。別に囚われの身でいる訳じゃない。君だって住んでいる区域で警報が発令されたら、最寄りの避難場所に駆け込むだろう。それと一緒にだ」

「僕、野宿とかしたことないんですけど」

「じゃあ、いい機会だ」

間宮は笑いかけてきた。相対する者の警戒心を取り払ってしまうような、人懐っこい笑みだった。

「言っておくが、公園のベンチと同じに考えてもらっては困る。天井が高く、呆れるほど広い寝室だ。慣れればホテルのベッドより快適な睡眠が得られる」

自信たっぷりなところを見ると、それなりの寝具は備えているのだろう。電気を使えるのであれば、冷暖房を心配せずに済む。

そこで新しい不安が生じた。

「生活に必要な電気を線路から引つ張っているのは聞きました。でも百人分の生活に必要な電気となると、相当な電力だと思います。

そんな電力を横から奪い続けて、メトロや東京電力は全然気づかないんですか」

「その辺は独自のノウハウがあつてね。今日特別市民になったばかりの君には、まだ教えることに抵抗がある。地下の住人として耐性がついてきたら、追つて教えてあげよう」

「今は駄目なんですか」

「取りあえずは集団のライフラインに関する重要事項だからね。ちよつとだけ辛抱してほしいな」

「じゃあ電気・水道はともかく、その他の生活用品はどうやって調達するんですか。百人が寝起きするだけでも、相当な量の生活用品が必要になってきますよ」

「基本的にモノは増やさないようにしてるのよ」

これには香澄が代わつて答えた。

「タオルや寝具、食器に机に椅子。共有できる部分ではできるだけ共有して、なるべく品数を増やさない。必要でなくなったモノはほとんどん捨てる。言ってみれば断捨離だんしやりの団体行動」

「さすがに歯ブラシやコップくらいは個人所有だがな」

永沢が仕方ないというように嘆息する。

「ただし生活消耗品とかは補充しておかなきゃいけないし、食料も調達しなきゃならない」

「そうそう、廃駅の線路で畑を耕す訳にもいかねえし」

「そういう時は当番制で、地上へ買い出しに出るの。さっきあたしが小日向さんと出くわしたみたいだね」

まさか香澄が窃盗や強盗をするとは思えないので、深夜営業の店へ買いにいくのだろう。

買い出しという消費行動には、当然金銭が不可欠になる。ではない彼らはその資金をどこから工面くめんしているのだろうと、素朴な疑問が湧く。

「あの、皆さんは何のお仕事をされているんですか」

誰にともなく放った質問だったが、二人とも黙り込んでしまった。気まずい沈黙が続き、小日向は何やら禁断の話題に触れたらしいと怯える。

「君の口ぶりを聞いていると、彼らがホームレスか何かだと勸導かんぐしているらしい。でも違うよ。全員ではないけど、皆それぞれに仕事を持ち、労働の対価で生活の糧かてを得ている」

間宮の回答は核心から微妙に外れたものだった。やはり明確には答えたくないらしい。

「ライフラインの次は個人情報か。君は存外に知りたがりらしい」
「そんなことはありません」

「区役所で生活支援課にいるんだってね。生活保護を求めてきた申請者にも、そんな風に根掘り葉掘り質問しているのかい」

「申請に必要な事項を訊いているだけです」

「わたしも現段階で必要なことしか話したくない。最初から何でもかんでも知ろうとすると、後の楽しみがなくなってしまうよ」

「またもはぐらかされたので、質問を変えることにした。」

「あの、さっき聞きそびれたんですけど、〈エクスプローラー〉というのは」

「訳はそのまま〈探検者〉だね。別に正式な名称じゃないけど、誰かが言い出したのが、そのまま通っている。子供っぽいけど、じめじめしていないから皆が気に入ったんだろうね」

地下に住まう者が〈探検者〉というのは出来すぎのような気がするが、新入りが口出ししてもいい顔はされな^いだろうから黙っている。

「色々と予想外の展開で面食らっていると思うけど、君にとってはそんなに悪い話でもないだろう。個人的には君のような人間が迷い込んできたのも、一種天啓^{てんけい}じみたものを感じるしね」

間宮の言葉は漠然としていて、よく分からなかった。

「天啓ってどういう意味ですか」

「同じ種類の集団というのは結束が固い一方で、どうしても膠着こうちやくしやすい。目的も価値観も同じだから柔軟性がなくなる。だが、その中に異分子が混入することで刺激され、化学変化が生じる」

「先生、それはどうなんですかね」

永沢が胡散臭うさんくさそうな一瞥を投げて寄越す。

「俺たちはこのままでいい。って言うか、このままでないと存続するのが難しいじゃないですか。敢えて刺激を与える必要なんてあるんですかね」

「わたしたちがそう願っていても、外部環境は刻一刻と変化する。それなのに集団が旧態依然のままでは、早晚立ち行かなくなってしまう。集団というのは、そういう宿命だよ」

「相変わらず先生の言うことは、高尚こうしょう過ぎて分からねえや」

「あつ」

不意に香澄が短く叫んだ。

「そう言えば小日向さん、どこから地下に下りてきたの。あたしたちがいくわしたのって萬世橋駅だったよね」

「駅の真上に出入口があって、そのグレーチングを開けて侵入したんだよ」

小日向は事もなげに言ったが、三人はひどく驚き慌てた様子だった

た。

「それで作業着なんか着てたのか。そのカッコでうろついてただけだと思ってたのに、いったい何てことしやがる」

「小日向さん。グレーチングは外したままなのか」

「ええ、あれは内側からは閉められませんから。でも大丈夫ですよ。

グレーチングの周りにはカラーコーンを置いて工事中を装ってますから」

「とんでもないことするわね」

香澄は心底呆れ果てたようだった。

「やっぱりマニアの人って犯罪者だ。ないわー」

「今すぐ戻してこい」

永沢に至っては乱暴に背中を押した。

「ここに忍び込んでからずいぶん経っているんだろ。その間、ずっとグレーチングが外れたままだと、変に思うヤツがいる。第一、あ

そこは万世橋署と目と鼻の先じゃねえか」

「でも、ちゃんとお巡りさんの巡回時間を確認して」

「おとなしい顔してる癖に大胆つつうか、後先考えないつつうか。よくそんなんで区役所勤めしてるな」

「やれやれ、とんだ特別市民だねえ」

間宮までが露骨に迷惑そうな顔を見せる。

「急いで引き返すよ」

いきなり香澄に手首を掴まれた。

「どうせ、あたしも買い出しの途中だったし。今から一緒に引き返して出口塞いでくる」

「そうしてくれると助かるな」

二人をその場に残し、小日向は香澄に引っ張られるようにして萬世橋駅方向へと駆け出した。

元の場所まで戻り、香澄を引き連れて階段を上がる。地下住人の香澄もここから出入りするのは初めてらしく、ひどく物珍しそうな目で通風孔を見上げていた。

「犯罪の現場だあ」

小日向が先に顔を出し、次いで香澄を引き上げる。

「撤収の用意するから、ここで待っていてくれないか」

縄梯子とカラーコーン、そしてグレーチングフックを回収し、ビルの陰に身を潜める。リュックに道具と作業着を詰め込めて普段の服装に戻ると、やっとひと息吐いた。

えらく濃密な時間だった。濃密すぎて地下空間で体験したことが全て夢だったような気さえする。廃駅の構内に住まう住人、長老を指導者と崇める（あが）（エクスプローラー）たち——口外するなど厳命されたが、仮に喋ったところで本気にする人間は皆無（かいむ）だろう。

地上の空気がみるみるうちに、小日向を現実に取り戻す。このまま通風孔に引き返したら、香澄の姿も消えているのではないか。

半信半疑で戻ってみると、想像以上の光景が繰り広げられていた。

香澄が二人の巡査に問い詰められていたのだ。

「君ね、いくつ？」

「学校どこ。学生証、提示しなさい」

香澄は半ば怯え、半ば拗ねているように見える。

無意識に足が出た。

「あー、すみません、すみません」

小日向が姿を見せると、巡査たちの顔がいくぶん和らいだようだった。

「僕の連れなんですけど、何かありましたか」

「連れてって、あんた保護者？」

「えっと、妹なんですけどね」

小日向は自分の身分証を提示する。同じ公務員同士というのも手伝ってか、巡査たちは身分証を確認するなり警戒心を解いた様子だ。

おお、偉大なるかなニッポンの公務員。

「すみません、もう遅い時間なのは分かってたんですけど僕が一緒にいたなら問題ないと思って」

「まあ、お兄さんがお目付け役なら変なヤツに絡まれることもない

でしょうけど、なにぶん未成年の夜間外出となれば、わたしたちも無視することができませんので」

「ご迷惑をかけました。今後はこんな時間に引っ張ってきません」

「そうですか。じゃあお気をつけて」

巡査たちは何事もなかったかのように立ち去っていく。その後ろ姿が見えなくなってから、ようやく小日向は安堵あんどの溜息を吐いた。

「意外」

香澄が不思議そうにこちらを見ていた。

「何がだよ」

「小日向さんが出てきた時、てっきり地下のことをバラすと思っていた」

「どうして、そんなことするんだよ」

「警察が知って一斉に踏み込まれたら、永沢さんたちが小日向さんの個人情報個人情報を拡散させるより早く、話が解決するかもしれないじゃない」

あっと思った。

そういう破れかぶれのような方法もあったか。しかし咄嗟とつさに思いついたのは香澄を庇かばうことで、他はまるで眼中になかった。

「ちよっと見直した」

「そうか。僕は逆に自分が馬鹿みたいに思えてきた」

「ねえ。ついでだから買い出し付きあつてよ。一人じゃ持ちきれない買物なんだ」

小日向は大袈裟おおげさに溜息を吐いてみせたが、悪い気分ではなかった。

〈つづく〉